

海外保育留学とその準備期間の教育的効果の検討

Consideration of the Educational Effects of the Abroad Childcare Study and Its Preparatory Period

松崎 真実¹⁾ 石川 悦子²⁾ 本多 舞³⁾
 MATSUZAKI, Mami ISHIKAWA, Etsuko HONDA, Mai

キーワード：保育留学、SEQ、英語力、教育的効果

I はじめに

I-1. 本学の保育留学制度の仕組み

2020年初旬から始まったCOVID-19の世界的パンデミックの影響により、日本学生支援機構が実施している「日本人学生留学状況調査」で大学等が把握している日本人学生の海外留学状況は、2020年度で1,487人、対前年度比105,859人減となっている。この背景としては、留学先の入国制限措置等のため、留学を断念・延期したことや、留学先大学等が、受入れを中止・延期又はオンラインのみによる授業となり渡航が不要になったこと、留学先国・地域の感染拡大状況や外務省が発出する「感染症危険情報レベル」が全世界的にレベル2（不要不急の渡航取りやめ）以上に指定されていることなどを考慮したことが影響していると考えられる。留学生数の多い国・地域は、韓国265人（対前年度比6,970人減）、アメリカ合衆国240人（対前年度比17,898人減）、カナダ189人（対前年度比9,135人減）、オーストラリア109人（対前年度比9,485人減）、英国89人（対前年度比6,629人減）である。コロナ禍以前は全世界で留学者数が増加していたのに対して、日本人は2008年にピークに達してから以降、減少しつづけている。また、2022年3月以降急激に進行している円安傾向など、近年の日本の社会経済情勢の変化から、今後留学が困難になる学生が増えることが予想される。

その一方、文部科学省は2013年より海外留学を支援するためのプログラムを打ち出し、幅広い分野の学生が留学できるよう様々な奨学金を用意している。しかしながら、前述したような経済的要因だけではなく、コロナ禍

による海外渡航の難しさや内向き志向の若者の増加により、海外留学が大学生にとって挑戦しやすい状況にあるとは言い難い。

本学では、2023年2月からオーストラリアで11カ月に亘る保育留学プログラムが始まる。滞在地のオーストラリアクィーンズランド州ゴールドコーストで学生は15週間の語学研修を受け一定の英語水準に達したと認められた後、29週間の保育留学プログラムに派遣される。保育留学プログラムでは実際に現地の園での実習や課題を行い、クィーンズランド州政府が要求する単位を全て修得する。単位の修得と実習が終わると、オーストラリアの保育資格であるCertificate III Child Careが授与される。この資格はオーストラリアの保育所で職員として働くために最低限必要な資格である。学生は本学の保育留学プログラムを通して、オーストラリアのTAFE(Technical and Further Education：オーストラリア国内の州立職業訓練専門学校)で保育の知識を学ぶ体験をし、国籍の異なる学生や子ども、ホストファミリーと触れ合う異文化体験を経験する。また語学の習得のみならず、オーストラリアの保育園に実習に行くことで、他国の保育を経験し、保育資格を得ることができる。このプログラムに参加した学生は大学4年間の在学期間に11か月間の留学を体験でき、卒業は他学生と同じ4年間で満了した時であるため、時間を有意義にも使える。費用面でも、本学に支払った学費を留学先の学費に充てるため、自費で行くよりも負担が少なく、金銭的な不安の解消が見込まれる。さらに、留学希望の学生は3年生から筆者が受け持つ留学予定者対象のゼミナールに配属され、留学を共にする仲間と年間を通して、英語、多文化共生、留学先のオーストラリアについてのレクチャーを受けることができる。加えて、秋学期からはオーストラリア国籍の講師による本場の伝統や食文化も体験的に学修する。留学を目指す学生達はこのような経験を通じて、お互いに支え合う関係を形成することが期待できる。留学初年度生

1) こども教育宝仙大学 専任講師

2) こども教育宝仙大学 教授

3) こども教育宝仙大学 専任講師

が所属する本学の留学ゼミナールは、2022年4月から開始され現在8か月を迎えている。

I-2. 本研究の3つの視点

留学前の効果的なプログラム開発を目的として、留学経験の検証が質的・量的ともに行われており、結果の解析から方法論まで、留学を題材とした論文は多岐に及ぶ。李(2019)は、留学経験は英語能力以外の異文化理解力などの非認知能力を高め、それが競争倍率の高い企業の内定に繋がったことを挙げている。

本学の留学プログラムも、初の試みを多く取り入れ、学生にとってよりよい留学が出来るよう準備を進めている。本稿では本学の保育留学プログラムの準備期間を通して、学生に行う教育の意義やその効果について3つの視点で考察する。

1番目の視点としては、保育留学プログラムの意義についての考察である。昨今の大学生の留学に関する動向について整理し、他大学の保育留学の事例から本学の保育留学プログラムについて紹介し、保育留学の効果や課題について検討する。

2番目の視点としては、保育留学プログラムが学生の精神面に与える影響である。本学の保育留学プログラム参加の学生達は、従来ならば4年間で修了するはずの日本での資格取得(保育士資格と幼稚園教諭一種免許状)の教育課程を3年間で終えなければならず、他の学生に比べて負荷がかかりやすい。しかしながら、留学という共通の目標に向かって1年間同じ留学ゼミに配属し、悩みや苦勞を共有しながら課題をこなしていくことで、精神的な成長が促進される可能性もある。この点について、自分の性格や行動傾向を知った上で、自らの感情や気持ちをうまく管理することができれば、留學生活を乗り切る大きな力となる得る。その目的に沿って、本研究ではSEQ(Student Emotional Intelligence Quotient)を利用し、「心的知性」「対人関係知性」「状況判断知性」を調査した。具体的方法としては、留學予定学生と、他のゼミ生の結果を比較検討するとともに、各自の検査結果の理解について専門の講師を招いて研修を実施した。また今後最終的には、留學前と留學後のSEQの結果を比較し、留學経験が各自の行動変容に与える影響について統計的に検討する予定である。

3番目の視点としては、継続的で自主的な英語学習や多文化学習、留學先の文化について学ぶことが留學する学生達にどのような変化をもたらしたのか、ゼミナール内の各プログラムに対しての意見と留學にまつわる心情変化や皆で留學する事への自由記述式のアンケートによる分析を行い、留學前ゼミナールの取り組みとして行う

べきことを検討する。

II 3つの視点から

II-1. 保育留学プログラムの意義

1. 日本における在留外国人及び保育の国際化の現状

出入国在留管理庁によれば、2021年末の在留外国人数は276万635人となっており、在留外国人数が多い都道府県は、第1位：東京都、第2位：愛知県、第3位：大阪府、第4位：神奈川県、第5位：埼玉県、となっている(2022年3月29日 報道発表資料)。

また、2021年3月に三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社から出された「外国籍等の子どもへの保育に関する調査研究報告書」によると、全国の市区町村の保育主管課を対象とした調査では、68.6%(n=1139)の保育所が外国籍等の子どもが入園していると回答している。同報告書では、外国籍等の子ども・保護者の受け入れに関して直面している課題として「外国にルーツを持つ子どもや保護者の具体的な困りごとやニーズがわからない」「通訳や翻訳を行える人員が足りない」「専門的な知識・理解が不十分である」等があげられている。

幼保小連携の観点では、グローバル時代に対応した小学5-6年生から始まる英語必修化等に伴い、外国人講師を招いて英語での保育活動を設ける園、1日中英語で保育を行うプリスクール、国際バカロレアを導入する園など、就学前から英語に触れる機会を設けている園が増加している。

このような現状において、これからの保育者には異文化理解や語学力が求められていくことが予想される。近年、保育者養成校では「国際教養こども学科」「国際こども教育学科」といった学科を置き、異文化理解や海外の保育について学ぶ科目や保育留学制度を設ける等、グローバル時代に合った保育者養成を実践している大学が増えつつある。また、本学の学生の多くは東京都内から通学しており、神奈川県や埼玉県から通学している学生もいるため、卒業後に外国籍の子どもたちの援助を行う可能性が高い。そこで、本章では大学生の保育留学の意義について検討することを目的とする。

2. 方法

政府から出された資料より、昨今の大学生の留学に関する動向について整理する。その上で、先行研究より他大学で実践されている保育留学の事例を踏まえて保育留学の意義と課題について検討する。

表1 求める人材像

- ・世界の人々との交流を通じた経験から学び、多様な価値観を柔軟に取り入れようとする態度
- ・独自の視点や考えを有し、自らの志を先例に捉われずに具体化するための思考力と行動力
- ・世界のグローバルリーダーと対等に渡り合い、国境を越えて活躍し、日本・世界に貢献したいという高い志
- ・集団活動においてイニシアチブをとり、対話・協働しながら周囲を巻き込む能力
- ・様々なことに好奇心、探究心を有し、未知の領域に対しても果敢に挑戦する姿勢
- ・専門性を有しながら、既存の分野・領域に捉われず広い視野を持ち、社会課題の解決に取り組む能力
- ・失敗から試行錯誤しながらも挑戦し続ける強い精神力

トビタテ！留学JAPAN（2022）より引用

3. 近年における大学生の留学動向

日本の大学生留学者数は2004年をピークに減少傾向だったが、グローバル化に対応する人材力強化や東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催等から、文部科学省は2013年10月より官民協働でグローバル人材を育成するため留学促進キャンペーンとして「トビタテ！留学JAPAN」を創設し、留学を通じて以下のような素養を身につけようという意欲を有する人材を求めている。

官民協働だからといって、表1で求められているのは一般企業に就職予定の学生にのみ向けたものではない。多文化共生社会において多様な文化・背景を持つ子どもや保護者の価値観への柔軟な受け入れ、子どもとの対話や保育者間での協働の重要性、子どもにも育むべき好奇心・探究心等は、保育職志望の学生にとっても必要な資質・能力であることは明らかである。

留学の効果として、福岡（2017）は語学力向上、積極性の高まり、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの深まりについて有効であり、様々な手続きを学生自身が行うことで主体性や実行力なども育まれると述べている。また、前田（2019）は留学した学生へのPAC分析から、留学後は異文化に対してより客観視できるようになった傾向が見られたとしている。山田・小田桐（2020）では、学生へのGPS-Academic調査から1週間程度の超短期留学であっても「批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力、レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション、自己管理、対人関係、計画実行」の9項目の数値が上がったことが報告されている。

一方、留学の課題として太田（2014）は、大学在学中の海外留学・研修に対する阻害要因として①就職活動の早期化と長期化、②単位交換（認定）制度の未整備と学

事暦の違い、③大学での国際教育交流プログラム開発の遅れ、をあげている。一般就職の場合、3年次の秋から4年次にかけて就職活動を行う仕組みになっているため、3年次から4年次にかけての留学自体が学生に抵抗感があるという。単位交換制度についても、海外の大学の単位積算方法や授業時間数などが異なることから、単位認定が困難な場合がある。さらに、諸外国に比べ、日本の大学は学生の関心を海外留学・研修に向ける努力が欠けていると指摘している。

4. 保育留学の効果と課題

次に、すでに保育留学を実践している大学の事例を整理する。現在、保育留学を実践しているのは桜花学園大学、名古屋短期大学、フェシリアこども短期大学等とまだ少数のため、保育留学に関する研究は蓄積されていない現状がある。名古屋短期大学専攻科では、保育留学に関する指導を10年余り試行錯誤しながら実践しており、1年次にオーストラリアの専門学校で9カ月間留学し、所定のコースを修了することでオーストラリアの保育士資格（CertificateⅢ）を取得するプログラムとなっている。高橋（2019）は、保育留学後の学生は①公務員、②インターナショナルプリスクール、③オーストラリアに再渡航して現地で保育職を得る、④一般的な保育所に就職する、⑤英語教育に力を入れている園への就職、大学院進学、保育系以外への就職、海外でさらに上の資格取得コースに入る、といった多様な進路を選択し、通常の保育科とは大きく異なると述べている。同大学では保育留学後に公務員を選択した学生が、保育現場での多国籍児の増加に伴う異文化対応の保育者として重用される場合もあるという。保育留学を経験したことで視野が広がり、帰国後の進路選択が多様化し人生の幅が広がることや、園の多文化共生に対応できる保育者養成が育成さ

れることは、保育留学による効果だと考えられる。

保育留学の課題として、1つ目に英語力への不安があげられる。桜花学園大学では、オーストラリアの長期留学を控えた学生に対し、英語力の不安を解消するため留学準備科目の中で英語学習計画作成の時間を設け、効果的な英語学習を進められるよう促す等の工夫を行っている(加藤ら2021)。2つ目として、留学中の学生の管理に関する課題である。留学中は大学生という本職とプライベートの境界線が曖昧で、教員が学生を管理するのが困難である。そのため、学生と大学側で危機管理等について一定のルールを設ける必要がある。高橋(2021)では、海外での自動車所有の禁止や日本人同士でのシェアハウス使用の禁止というルールを設けており、学生に大学側の願いや意向を理解してもらう相互理解が重要だと述べている。大学側としては、保育留学生在が充実した留学生活を送った上で無事に帰国してもらうことが最も留意すべき点であり、事前指導の中で留学中のルールについて明確にし、留学中はオンライン等を活用した学生と教員の定期的なコミュニケーションが必要とされるだろう。

5. 本学における取組み

本学では、初めてのオーストラリア保育留学(2023年2月から11カ月間)に向けた様々な取組みが行われている。オーストラリアは自然環境に恵まれ、生活水準も高く治安が良いため、留学先として人気があり教育水準も高い。そして歴史的に移民や留学生の受け入れに積極的で、留学生の受け入れと保護を保証する法律が制定されている。そのため、教育・保育現場において多国籍化しており、様々な文化・背景を持つ子どもたちが共生しており、異文化理解を学ぶには最適な場所である。

太田(2014)であげられた就職や単位交換制度の課題を乗り越えるため、本学では通常4年次に行われる教育実習を3年次の7月及び9月に実施し、留学期間中の必修科目はゼミ以外ほぼ履修済の状態ですべての出発できるよう工夫している。保育留學生は全員大学附属の幼稚園で教育実習を行うことになっている。通常の実習と異なり履修者全員が同じ園で実習を行うため、事前事後指導では他の学生の指導案や実習の振り返りについて真剣に見聞きしている姿が見られた。また、英語力の不安を解消するため、さらにはアメリカ英語と少し異なるオーストラリア英語に慣れるため、ゼミではオーストラリア人の英語講師を招いての英会話レッスンやオンラインレッスンを頻繁に実施している。これまでの大学生活でほとんど話したことのなかった学生同士が集まったところからスタートしたが、実習やゼミを通して相互理解、

協働性、コミュニケーション力等を獲得している様子が伺える。これは黒岩ら(2016)で言われているように、留学準備段階から能動的な思考に変容しているプロセスであり、保育留学の意義の一つと考えられる。

就職に関しては、保育留學生一人ひとりに対して実習キャリアサポートセンターの職員が3年次の10月からすでに帰国後の進路についての面談を行っている。今後の予定としては、保育留學生の就職サポート担当教員が英語に力を入れている園や一条校のIB認定校幼稚園、プリスクール等に学生を引率し、学生が就職を希望する園が見つかった場合は本学の保育留学制度についてご理解頂いた上で、就職試験の日程等について園と交渉することを予定している。

課題としては、留学中の学生の管理方法や心身の健康サポート体制などがあげられる。2月の出発時は教員が現地まで引率するものの、その後学生はこれまでと全く異なる環境でホストファミリーと生活を共にしながら語学学校や保育現場へ行く日々となる。そのため、急激な生活の変化による様々なストレスを抱えることが予想され、サポートが必要な学生が出た際の連絡網や連携について検討しなければならない。また、高橋(2021)で言われたように、留学中の学生の管理をどのように実施していくのかについても、今後方針を決めることが急務である。

今後の研究課題としては、留学前後で異文化理解に対する変容は見られるのか、という点について調査を実施したいと考えている。本学の保育留學生の事例を通して「トビタテ!留学JAPAN」が求める人材像や福岡(2017)や前田(2019)の結果とどのような共通点・相違点が出てくるのかを明らかにし、本学の保育留学を通して多文化共生社会時代の保育現場で活躍できる人材を育成することができるのか検証していきたい。

II-2. SEQ を活用した分析

1. EQ と SEQ について

EQ (Emotional Intelligence Quotient) は、米国の心理学者ピーター・サロベイ (Peter Salovey) とジョン・メイヤー (John D. Mayer) によって1990年に提唱された理論である。日本語では「心の知能指数」と意識され、仕事や人間関係において感情をうまく管理し、利用する能力であり、学生EQセンター(2022)によれば「自分と相手の感情に目を向け、それをうまく調整することで問題解決やコミュニケーションに利用する能力」と定義している。即ち、EQは他人の感情を感じ取る能力と自分の感情をうまくコントロールし利用する2種の能力といえる。EQが高い人は相手の気持ちを敏感に察し、自

SEQ								
心内知性			対人関係知性			状況判断知性		
自己認識力	ストレス共生	気力創出力	自己表現力	アサーション	対人関係力	対人受容力	共感性	
私的自己意識 1	自己コントロール 5	セルフエフィカシー 8	情緒的表現性 12	自主独立性 14	対人問題解決力 17	オープンネス 19	感情的温かさ 22	
社会的自己意識 2	ストレス対処 6	達成動機 9	ノンバーバルスキル 13	柔軟性 15	人間関係度 18	情緒的感受性 20	感情的被影響性 23	
抑鬱性 3	精神安定性 7	気力充実度 10		自己主張性 16		状況モニタリング 21	共感的理解 24	
特性不安 4		楽観性 11						

図1 SEQの構成（3つの知性、8つの能力、24の素養）

分の気持ちをコントロールして人に接するため、無用な衝突を生むことはなく、人間関係を円滑に育む特徴も持っている。

IQ (Intelligence Quotient: 知能指数) との違いについては、IQ は所謂「頭の良さ」と解釈されることが多く、一般的にIQが高い人は頭の回転が速く記憶力も良いため、学業において高い成績を残すことが多いとされている。IQは先天的な要素によるところが大きく、訓練によって飛躍的に高めることは難しいといわれるが、EQは意識してトレーニングすることで高めることができる。

留学は、学生達が日本での日常とは異なる新たな環境に学習の場に身を置き、学業を含めさまざまな経験を積み、個人の価値観のパラダイム変換を含めた広義の心の成長、人間の成長が促進される貴重な教育の機会である(奥山 2017)。また、畠・成行(2016)は、初年次からのキャリア教育の一環としてSEQを活用して指導に着手した実践例を報告し、武知ら(2020)は、EQを用いて海外研修に赴いた学生と海外研修に赴かない学生を比較対照群として同一の調査を実施し、留学の効果検証への試みを報告している。また、名古屋短期大学専攻科では、2017年度にSEQを活用して「留学タイプ」(20名)と「国内タイプ」(20名)の受診結果を比較し報告している。「留学タイプ」はオーストラリアの保育士資格取得を目指し11ヶ月間留学をする学生で、「国内タイプ」は日本国内で7ヶ月に渡る長期実習を経験する学生である。SEQ検査は出発前の4～5月と帰国後の3月に行い、その結果、留学タイプの学生は、留学前の時期から日々の生活の充実感を実感している人が多く、留学を含む目の前の物事に明るく前向きに取り組む姿勢が窺えたことと、留学後では、もともと感じていた充実感に加え、自分に対する自信や肯定的な考えをする行動量が大きく増加した。留学という経験が、学生を一回り「タフ」な人間に成長させたことが窺えると報告している。(大学生協学生センター学生EQより)

対人援助を伴う保育留学プログラムにおいて、「他人の感情を感じ取る能力」と「自分の感情をうまくコントロールし利用する能力」は非常に重要であり不可欠な能力であるといえる。そこで、学生一人ひとりが自らの行動の特徴を把握して「強み」と「課題」を考え、「なりたいたい姿」に近づく、自律的な成長サイクルを育むための指標としてSEQを活用することとした。

SEQ(スチューデントEQ)は、大学生協学生EQセンターによればEQ理論提唱者の監修を受けて開発された日本で唯一の大学生向けEQ行動特性検査であり、「3つの知性」と「8つの能力」、その能力を生み出す「24の素養」から構成されている。3つの知性とは、「心的知性」「対人関係知性」「状況判断知性」から成る。

2. 方法

2022年7月に、留学予定者6名と同学年の他のゼミ学生(15名)に対してSEQ検査を実施した。受診前には、ゼミ担当教員よりその目的と方法について説明し、受診は自由意思によるものであることを伝えた。検査はWeb上で各学生が回答する形で実施した。回答率は21名(100%)であった。回答は学生EQセンターで集約され分析を経て各学生へフィードバックされた。同時に担当教員へは、所属ゼミがわかる形で電子データが提供された。その後同年9月28日(水)に、ゼミの時間を使って大学生協学生EQセンターより講師を招いて結果の解釈について研修会を実施した。

3. 結果と考察

今回の受診者全体の平均値において(図2)、比較的高い55%以上の素養は「共感的理解」「感情的温かさ」「オープンネス」「人間関係度」であった。それに比して45%以下のものは、「抑鬱性」「自己独立性」「自己主張性」であった。SEQハンドブック(学生EQセンター)

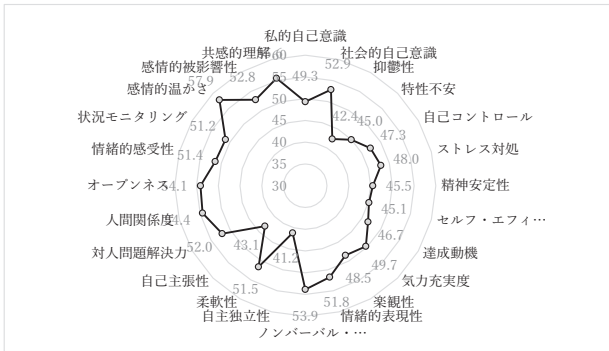


図2 受験者全員の24の素養の結果 (平均値)

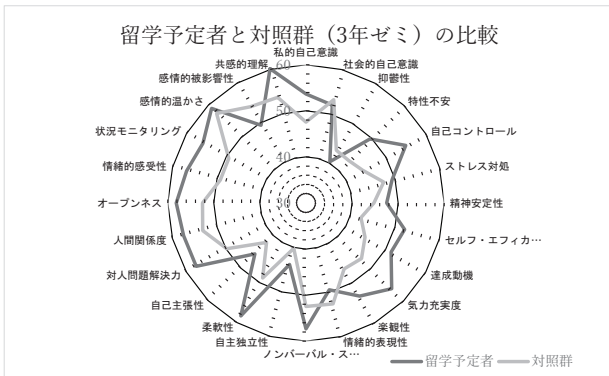


図3 留学予定者(6名)と対照群(15名)の平均値の比較

によれば、共感的理解がハイスコアの場合は「相手の気持ちや思い、相手の立場に立って理解しようとする傾向が強い」。感情的温かしのハイスコアは、「人に対して温かみのある受止め方をし、温かい気配りや振舞いをする」。オープンネスのハイスコアは、「相手の心を開いてもらうために、自分の方から心を開くことが多い」。人間関係度のハイスコアは「人との関係を大切なものと考え、積極的に人間関係を築こうとすることが多い」。これらの結果は、保育職を目指す学生にとって求められる素養といえる。他方、抑鬱性がロースコアの場合は、「過去の失敗や過ちをいつまでもくよくよと考えてしまい、自分に対する悲観的・否定的考えをすることが多い」。自己独立性のロースコアは「人に頼ったり同調したりすることが多く、物事を主体的に進めることが少ない」。自己主張性のロースコアは「自分の意見や判断を相手に率直に伝えることが少ない」。これらの結果は、日頃の学生達の姿と重なるものであったが、自己独立性や自己主張性が少しでも高くなるよう個々の学生が意識することも必要ではないかと思われる。

次に、留学予定者と対照群を比較して10ポイント以上留学予定者が高得点であったのは、「自己コントロール」と「気力充実感」「セルフ・エフィカシー」「柔軟性」の素養であった。レーダー図の全体の形を見ても、留学予定者の方が高得点であることが明らかであった。「自己

コントロール」は、ハイスコアであるほど「自分の感情をコントロールし感情を表に出すことが少ない」。「気力充実感」は高得点なほど「毎日の生活が楽しく充実感を得ることが多い」。「セルフ・エフィカシー」は「何をするにも“自分ならできる”という信念が強く自信をもって取り組むことができる」。「柔軟性」は「自分と異なる意見ややり方を柔軟に受け入れることが多く、ルールや既存の概念にとらわれることが少ない」。

以上の結果から、とくに「セルフ・エフィカシー」や「柔軟性」において留学予定者が他の学生に比べて高いという結果を得た。この強みを生かして留学生活を乗り切ってほしいものである。しかしながら、「抑鬱性」については、対象群よりもむしろロースコア（くよくよ考える傾向が強い）であり、今後は、自責と他責を整理して書き出してみるなど自助努力が求められる。また今回は、各群の平均値で比較したが、個人のスコアに落とし込んで各自が具体的な努力目標を挙げて行動を変えていくことが重要である。今後、留学終了後には、このSEQを今一度実施して今回の結果と比較検討し、留学の効果を検証する1つの指標として活用する予定である。

最後に、SEQを受け研修会を受講した学生の感想を記載する。

【学生の感想】色んなことを知って楽しかったです／勉強になりました／自分を客観的に分析することができました。感情を適切に上手く使えるように、日頃から意識していきたいと思いました。／自分のことについてよくわかった気がします。最初この調査をしている時は何しているか分からなかったし、何のためにしているのかわかなかったけれど、説明を聞いてとても分かったし、やる意味があるということが理解出来ました／自己分析することができました。／わかりやすい説明と、今自分がしていたことがSEQかと気付いたりして面白かったです。自分を客観的に見るキッカケにもなり良い機会になりました。ありがとうございます。／自分自身のことを数値やデータでわかることが出来て嬉しかったです。／話し合いや自分の性格を理解するものの例が分かりやすかったです。説明一つ一つがすごく分かりやすかったですと感じました。／ほぼ当てはまっていますごいなと思った。

以上のように、まずは自己理解を含め、その次には具体的な努力目標やなりたい自分を意識して生活することが重要であり、SEQは学生にとって自己点検をする際の有効な1つの指標になり得るとと思われる。

II-3. 留学ゼミで望まれること

1. 留学予定者へのゼミナール内容

留学ゼミの中では1年を通して様々な英語体験、異文

化体験を行う。春学期には25分間のオンライン英会話を対面ゼミ中に毎回行った。学生が不安にならないよう、4月は3人1組で、中級の教材での英会話をを行い、5月は3人組のまま、日本のことを紹介するプログラムを行った。6月からは2人組になり、世界各地で起きたニュースを読解し、質問に答え、自分の意見を言うという形でオンライン英会話を続け、7月には各自で18回のオンライン英会話を夏休みの宿題とした。春学期にオンライン英会話を受講しながら、学生が同時進行で行ったのは、海外でも使える保育教材作りである。海外の絵本を題材に、オーストラリアの保育園でも、また日本の保育園でも実践できるような作品を作った。完成した作品は1年生の英語の授業で披露した。

夏休み明けの秋学期には東京グローバルゲートウェイに1日英語体験に出かけた。東京グローバルゲートウェイでは自己表現する講座、多文化理解講座、ホテルや観光での英語の使い方講座を行い、半年に亘って学んだ英語を1日中使う体験をした。

10月からはオーストラリア人講師がゼミに来て、オーストラリアの紹介や空港での入国審査、入国書類の書き方などの説明や、オーストラリアの郷土料理の調理などを通しての食文化紹介等を行っている。今後は旅行社よりビザの申請の説明や渡豪準備に必要なものなどのオリエンテーションを行う。

11か月の留学予定者のみを対象としたゼミナールは今年初であり、春学期、秋学期を通して、日本にいながら海外生活に順応できるよう、プログラムを検討した。来年からのゼミナールの内容がより良いものとなるよう、また学生の精神状態等を知れるよう、10月末に留学予定者へアンケートを行い、春学期、秋学期の1ヵ月半で行ったプログラムの内、学生が良いと思ったプログラムやオーストラリアに行くことで変化した気持ち等について尋ねた。

2. 方法

留学予定者は10月の東京ゲートウェイ1日体験を行った後、オーストラリア人で留学予定のクイーンズランド州出身の講師のオーストラリアセミナーを行った。10月末時点で、1年間のゼミナールで予定されているプログラムを1回ずつ体験したため、留学ゼミナールで提供したプログラムの中で、役に立ったと感じたもの、その反対になくてもよいと思ったプログラムは何か尋ねた。また、自由記述として、オーストラリアに行く決めてからの気持ちの変化、留学について悩んでいる事、留学でどのように将来が変わるか考えているか、大学提供のプログラムを利用したことの利点と欠点を尋ねた。

3. 結果

3-1. ゼミナール活動の中で役に立ったと思ったもの

留学予定者がゼミナール活動の中で最も役に立ったと感じていたプログラムはオーストラリアのビザや持ち物の説明など、渡航に役立つプログラムと東京ゲートウェイの1日英語体験であった。次に役に立ったと感じていたことは、対面ゼミナールならではのゼミナール内の友人とのディスカッションタイムであり、共に行ってきたオンライン英会話であった。オーストラリア人講師によるオーストラリアの文化講座や英語での保育教材作成は役にたったと感じている学生が3人ではあったが、一定の意義があったと感じている。

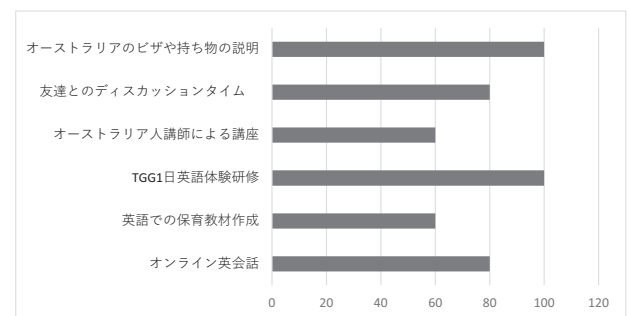


図5 留学予定者のアンケート
留学ゼミナール内で役に立ったと思うプログラム

反対になくてもよいと感じたプログラムについては、図5のどのプログラムも該当しないと全ての学生が答えた。この事から、プログラムによって学生の満足度は異なるものの、学生同士の話し合いの時間を持ちながら、多種多様なプログラムをこなし、外国人や多文化に対するハードルを下げ、コミュニケーション能力を育てていくことが、留学準備ゼミナールに必要なことが分かった。

3-2. 学生のオーストラリア留学にむけての気持ち 自由記述より

オーストラリアに行く決めてからの気持ちの変化

【学生の回答】 実習が続いてあることを知っていたのでそれが大変だと思った。／さらに楽しみや不安が大きくなった。／自分の気持ちを伝えやすくなった。／より楽しみになった／特にないです

留学について悩んでいる事

【学生の回答】 金銭面での不安がある／好きなことができなくなってしまうかと思った。／英語が話せるかの不安とあちの生活でうまくやっっていけるか／特にない／友達と10ヶ月離れて暮らすため少し悩んだ

留学でどのように将来が変わると思っているか

【学生の回答】 将来の選択肢が増える。／変わると思う／叶えたい夢に近づく／英語を話す能力が上がる

大学提供のプログラムを利用したことの利点

【学生の回答】 何かあった時に人に聞ける／何かあっても頼れる。／相談し合える／心の支え、一緒に頑張ることで共に乗り越えられる／実習を一緒に行けたこと

大学提供のプログラムを利用したことの欠点

【学生の回答】 なし／特になし／ない

学生の回答から読み取れるのは、オーストラリアに行く決めてから、渡豪を楽しみにする気持ちと不安に思う気持ちがあるということだった。また、不安になる要素については、金銭面や英語能力について、友人と離れることや好きなことを諦めなければいけないところだった。しかし、全ての学生が留学で自分の未来は良い方向に変わると思っていることが分かり、不安になる事はあっても、前向きに留学を楽しみにしていることが分かった。また、大学提供のプログラムを利用したことの利点は頼れる、相談しあえるという心の支えというコメントが多く、欠点への記述がないことから、全ての学生において大学提供のプログラムで行くことで不安の軽減があることが分かった。

Ⅲ 総合考察～今後に向けて～

本稿の目的は大学3年生2月から4年生12月までオーストラリアに保育留学に行く学生達の準備期間を振り返り、その教育的効果と海外保育留学の意義を検讨することであった。11か月間の保育資格取得のための留学は本学で初の試みであり、その準備期間を充実させることが留学へのモチベーションを上げることに繋がると考えた。しかしながら、海外留学はコロナ禍と円安傾向の日本において、以前よりハードルが高くなっている。このような状況下で、本学が今後、更なる海外保育留学の充実を図るため、その意義を明らかにした。その結果、先行研究から海外留学の意義として語学力の向上はもとより異文化に対する理解や主体性、帰国後の就職選択の多様性があげられた。特に、外国籍等の子どもや保護者への援助が求められる保育者を育成する上で、すでに多文化共生社会を実現しているオーストラリアへの保育留学を通して多様性や異文化理解を実体験することは大きな意味を持つ。一方、保育留学の課題として英語力への不安と留学中の学生の管理があげられた。本学では、オーストラリア人講師を招いての英語講座やオンライン英会話講座を実施しているが、今後は各学生の英語力に応じ

た個々の対応も必要だと考える。また、留学中の学生管理に関しては、担当教員で一定のルールを設ける必要がある。今後は、保育留学生の留学前後における異文化理解への変容について調査及び分析を行いたい。

学生の行動傾向について、留学予定者と留学をしない学生の行動傾向を調べたところ、留学予定者と対照群を比較して10ポイント以上留学予定者が高得点であったのは、「自己コントロール」と「気力充実感」「セルフ・エフォカシー」「柔軟性」の素養であった。この3点は留学において、自分をコントロールしながら、自分なら出来るという信念をもって新たな環境に気力を充実させ飛び込むために必要な要素である。しかしながら、「抑鬱性」については、対象群よりもむしろ低い傾向があり、留学予定者は自責と他責を整理して書き出してみるなど自助努力が求められることを考察した。本研究では各群の平均値で比較したが、個人のスコアに落とし込んで各自が具体的な努力目標を挙げて行動を変えていくことが重要である。実際にその理解のための研修セミナーを行ったところ、学生からは肯定的な意見が多く出た。留学終了後には、このSEQを今一度実施して今回の結果と比較検討し、留学の効果を心理的な側面から分析していきたいと考えている。

留学ゼミナールの内容においては、満足度が高いものがほとんどである事が分かった。なくてもいいと答えたプログラムは存在しなかったことから、次年度からも本年度のプログラムを継承し、学生の関係作りと英語力の向上に取り組んでいきたい。学生の自由記述において、大学のプログラムで海外に行けることを好意的に解釈している学生が多かった。その理由として、支え合いや不安の軽減を上げる学生がほとんどであった。この先も大学がリスク管理を行いながら、学生同士はお互いを支えあい、11か月間の留学期間を乗り越えられるよう、支援していきたい。また、今後は保育留学をした学生の異文化理解、行動傾向、英語力の変容を引き続き調査し、実際の海外保育留学が学生に与える多方面での効果を検討していきたい。

文献

- ・大学生協学生センター. スチューデントEQ (2022年9月10日閲覧)
<https://SEQ.univcoop.or.jp/educators/index.html>
- ・大学生協学生EQセンター (2022). スチューデントEQハンドブック第6版.
- ・畠一樹・成行義文 (2016). 初年次学生の行動特性把握によるEQ能力開発手法の提案. 徳島大学. 大学教育研究ジャーナル. 第13号, 23-37.
- ・福岡佑子 (2017). 大学における短期海外留学プログラム

- の教育的意義—徳島大学国際センターの取り組み—。国際センター紀要・年報, 11-13.
- ・加藤あや美・内田政一・小野克志 (2021). 海外保育留学における事前授業に関する考察. 桜花学園大学保育学部研究紀要第23号, 101-114.
 - ・木村啓子 (2006). 英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響—短期語学研修により英語力は向上するか— 尚美学園大学総合政策研究紀要 12, 1-20
 - ・小林明 (2016). 留学体験のインパクトと成果—留学経験者と留学非経験者の比較調査から. 留学交流 8月号, 第6巻.
 - ・小島奈々恵・内野悌司・磯部典子 (2014). 日本人大学生の海外留学に関する意識調査—「内向き志向」と留学意思の関係—。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集』第30巻, 21-26.
 - ・黒宮亜希子・橋本由紀子・金沢真弓 (2016). 海外留学に臨む大学生の実態と課題について—学生を対象とした調査を基に—。吉備国際大学研究紀要第26号, 121-133.
 - ・前田ひとみ (2019). 異文化理解教育における新たな試み—個人別態度構造分析による日本人学生の留学前後における異文化観の変容—。目白大学高等教育研究第25巻, 1-9.
 - ・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 (2021). 外国籍等の子どもへの保育に関する調査研究報告書
 - ・文部科学省 (2020). トビタテ! 留学 JAPAN
 - ・文部科学省 (2022) 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について
 - ・奥山和子 (2017). 留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス—質的研究手法を使って—。神戸大学大学教育研究. 第25号, 83-101.
 - ・太田浩 (2014). 日本人学生の内向き思考に関する—考察—既存のデータによる国際思考性再考—。留学交流 7月号, 1-19.
 - ・李嬋娟 (2019). 海外留学の効果に関する実証分析 —(非)認知能力と労働市場の成果を中心に—明治学院大学国際学研究 54, 1-28
 - ・出入国在留管理庁 (2022). 令和3年末現在における在留外国人数について
 - ・高橋橋一郎 (2019). 保育の海外留学のあり方—専攻科留学タイプ10年間の指導事例を通して—。名古屋短期大学研究紀要第57号, 93-108.
 - ・武知薫子・酒勾康裕・服部圭子 (2020). EQ 指標を用いた留学の効果検証方法—質的研究の探索補助としての量的研究の提案—。近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編11, 1-19.
 - ・山田司・小田桐一弘 (2020). 大学における超短期留学プログラムの取り組み (立命館大学全学留学プログラム Global Fieldwork Project の分析からみえた教育的意義). グローバル人材育成教育研究第8巻第1号, 46-57.

